

比較文化会報

August 1989 No.10

事務局 青森県弘前市稔町13-1
弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34-5211 内線 19

発行者 椎野正之
編集者 佐藤幸正

地方での立場

北東北支部長 奈良岡 保

昨年私はアメリカ研究の分野で地元有縁の三氏の著書に接することが出来た。

その一つは坂本正弘氏の「バクス・アメリカーナの国際システム」で、次は藤本一義氏の「アメリカの政治と政党再編成」(勁草書院)、そして石井菜穂子「日米経済論争」(竹中平蔵氏と共著、TBSブリタニカ)の三冊で、いずれも現代アメリカ、特にレーガン政権時代を中心に扱ったものである。

このうち、坂本氏のは十九世紀のイギリス中心の国際政治システムからアメリカ中心の二十世紀のアメリカの政治と外交の変遷と現状を分析した好著である。

坂本著書はそのアメリカもまた、南部サンベルト地帯で、特にフロリダ、テキサス、ニューメキシコ等の諸州でのハイテク産業の興隆と経済的繁栄、それに伴う州政治、主要都市や郡サイドでの民主共和両党の政党勢力の変貌を豊富な史料に據って分析したものである。

石井氏は日米貿易摩擦に象徴的であるアメリカの経済攻勢に対応出来る日本側の理論の欠如とその必要性を説得力のある論調で強調した精緻な論考であった。

これらの中でも藤本氏は、合衆国の北部アングロ・サクソンによる西部、南部征服の歩みが主流であった従来のアメリカ研究に対し、地方の実態調査に立脚した地域研究を焦点として成果をあげられたことが有意義で、例のF・J・ターナーの「アメリカ史におけるフロンティアの意義」が発表されて以来、ピューリタニズムとフロンティア学説だけでは説明しきれなくなっている現代アメリカ研究に貴重な貢献である。

尤も、私がこの著書を特に注目したのは、心の中で無意識的に、従来の歴史叙述が、概ね中央勢力による地方支配という形を採っている、日本史で言えば、東北地方についても、朝廷や幕府勢力の波及とそれへの服属として捉えられてきた史観に対する不満からでもあった。

しかもこうした地方疎外乃至は蔑視の風潮は単に過去のこととして終ったものでないことが起った。驚いたことに昨年、関西経済界ナンバールと称されているサントリーの社長が、同社の東北への企業進出に関連し「東北は今でも蝦夷が住んでいるレベルの低い土地」という意味の

発言をして大問題となり、慌てたご本人が東北各県を陳謝して歩くこととなったことである。

確かに、中央からみた東北は辺境であり、坂上田村麻呂や阿倍比羅夫によって服属された地である。が、これは一面を述べているだけである。私にはこのような見方は西方に次第に白人が来て土地を奪われ追い出されたインディアンを想起させ、インディアン歴史と自分が重複して行くことになる。

そこで私が言いたいことは、それぞれ地方の人々がもう一度地方の立場で自分の地域を見直し、再評価の視座を中央の視点から切り離して構築してゆく必要がないかという問題提示なのである。

例えば北辺の青森でも、明治以降に限ってみてもこの地は早くからキリスト教を受容して宗教と文化の基礎をつくり、産業面でも気候・風土に合ったりんごの作付を成功させ、新戸部稲垣、珍田捨巳、佐藤尚武などの国際人を出しているのではないか。誇りをもって正しく受けとめていい筈である。

青森県アメリカ学会は創立十五年、我々の比較文化学会もこの地に生れて十年となった。この「辺境」の地にあつて両学会を生み、育ててくれた開明的先駆者芳賀賢、西村清巳、太田敬雄の三教授もまた津軽の人々であった。

(弘前大・米国史学)

韓国訪問所感

芳賀 馨

今年四月二日―四日の短期間ではあるが、所謂「近くて遠い国」韓国を初めて訪れた。俗に、「町にはなんらんするハングル文字」を韓国の特徴と把握する考えがある。ある意味ではこれを正しいと考へる。そして、このハングル文字の中に、現在の韓国の社会状況の縮図を見る思いがする。緊迫した形での一種のナシヨナリズムである。

最近、英語の看板を出す店が出て来たことに対して年輩の世代は、げげな顔をする。「現代自動車」など、漢字で表示しているものは、むしろ異様にさえ映る。

機を見て、板門店(Check Point)に出掛ける。客は二人。一人は三十代後半のオーストラリア夫人。ガイドをつとめたのが、(恐らく大学生でアルバイトの韓国の)お嬢さん。必ずしも愛想のよくない彼女の説明の言葉のうちに、現在の韓国の知性的若者の有する現状認識の一端を感じ取る。'Check Point is, in a way, a tragic point for Korea.' と述べた私の所感に強くなすいていた彼女の表情が今でも私の心に焼き付いている。板門店は、現在の韓国の、朝鮮半島の国際社会における象徴的地点である。前述した韓国におけるナシヨナリズムも、この要素を抜きにしては論じえない。

同行のオーストラリアの夫人の心理にも、帰国してみる日本社会にも、韓国の現況にひそめられた緊迫感は全く存在しない。日本が幸せなのか否かという問題は別の次元のことかも知れない。

(副会長・福島県立医大教授)

南東北支部例会報告

一九八七年七月二日

▽英語の語彙はどれだけ覚えればいいのか

引地 岳雄

▽このごろ思うこと

斎藤 栄二

一九八七年十月三日

▽魅力あるパーソナリティ育成法

渡辺 勇

▽裏から言う表現について―日本語の論理と英語の論理―

楠 純一

▽黄泉(ヨミジ)と黄昏(タソガレ)の源を尋ねて

森 一

一九八七年十二月四日

▽人間存在理解の一アプローチ―スタインベックの『天の牧場』を通して―

鈴木美恵子

▽日本人の感覚でとらえた食文化の流れ

斎藤 和子

一九八八年三月二五日

▽クリーニングの世界

斎藤 皓

▽TEFL in the UK and USA

芳賀 馨

一九八八年七月二日

▽繊維業界の現状と'88年Fashionの動向

阿部 義巳

▽永田鉄山の国家総動員思想

佐藤 雅志

一九八八年十月二日

▽国際化について(講演)

富良野 純

一九八九年三月二四日

▽地球外知的生命体との交流

小野 和久

▽オペラの主役はだれなのか

上野 龍夫

青森県英語談話会活動報告

昭和六三年七月二五日(月)

「アメリカ留学体験談」 佐藤 和博

昭和六三年九月二〇日(火)

「アメリカ人に日本語を教えて」

西村 清巳

昭和六三年十一月七日(月)

「C・S・ルイスのJOY(喜び)について―「ナルニア年代記」を中心にして―

鈴木恵理子

平成元年六月二〇日(火)

「アメリカテレビ番組(英語のもの)を

見て話し合っ

西村 清巳

平成元年七月一八日(火)

「英語教育の問題点」 西村 清巳

森一教授の研究実る

今年四月から郡山女子大学教授として赴任した森一教授(南東北支部長)が、数年来研究して来た「職業と寿命」の比較文化論は、一昨年来、広くジャーナリズムの注目を浴びて来たが、この度「文芸春秋」(八月号)に、政治家・坊さん長生きの論証(二六〇頁―六七頁)というタイトルで掲載された。生物学者の、今日的比較文化論として会員諸氏の一読を奨めたい。

「国際日本文化研究会報告」出版

本学会々員、山形大学飯島武久教授の主宰する国際日本文化研究会が一九八二年発足以来数年に及ぶ実績を、この度、八六頁の冊子として出版し各界に配布した。飯島教授が「八日本語ですべて用が足りてしまう」という至便こそが、この国の人々の内なる閉鎖性として、新たな価値観創出の前に岩のように立ちはだかる「壁」を作り出しているのではなからうか」と指摘するように、当研究会はすべて用語を英語に統一して輝やかしい実績をあげている。

「バディ・チェイエフスキ
論纂」出版

福島県立医科大学・若狭教授編集「バディ・チェイエフスキ論纂」が、今年三月、東京・開文社出版から発行された。三三三頁(上製・二、五〇〇円、並製・一、八〇〇円)。日本比較文化学会や日本放送芸術学会の会員が中心になって執筆している。チェイエフスキは、現代アメリカ劇の三つのドラマジャンル(テレビ・舞台・映画)でそれぞれに成功を収めた特異な劇作家であるが、まとまったチェイエフスキ研究書は、日本では初めての出版である。

「夏目漱石の世界」

山形大学教授・飯島武久、東北学院大学助教授・ジエームズ・バードマン共編の「夏目漱石の世界」(The World of Natsume Soseki)が、東京・金星堂から出版され、日本図書館協議会の推薦図書に指定されているが、昭和六二年八月五日「山形新聞」の、小田基・東北大学教授の書評では、「実を結んだ地道な活動」として次のように指摘している。

「二つ付け加えさせていたくならぬは、このような事業を達成させることができただのは、飯島教授が五年前に発足させた、その活動を地道に積み上げてきている国際日本文化研究会が基盤にあることだろう。」

英文版で、執筆者も日本・アメリカ・イギリス・オーストラリア・カナダなど文字通り国際的である。(A5判・上製・三二六頁・四、五〇〇円)

近況報告

① 合同観桜会開催

JACC南東北支部とSMI福島クラブの合同観桜会が、去る四月二十一日(金、福島市野田町のウェディング・エルトイで開催され、会員相互の親睦を深めた。出席者約四〇名。



② メルボルン大学留学

私は豪日交流基金の奨学金をいただけることになり、一九八九年三月より、留学することになりました。

メルボルン大学の史学科です。あちらでどれだけのことができるか、全く確信が持てませんが、ベストを尽くしたいと思います。落ち着きましたらご連絡させていただきます。

(広島大学院・赤見 友子)

●●●●●
日本比較文化学会
●●●●●
第十一次大会報告

〔総会〕

一、報告

1 庶務報告

- (1) 「比較文化研究」 10号 一九八九年九月一日発行 編集責任者 芳賀 馨
- (2) 「比較文化研究」 11号 一九八九年十月五日発行 編集責任者 太田 敬雄
- (3) 「比較文化研究」 12号 一九八九年五月十日発行 編集責任者 石黒 昭博
- (4) 「比較文化研究」 13号 一九八九年九月一日予定 編集責任者 芳賀 馨

2 会計報告

▽詳細は総会にて、配布した資料通り
収入
合計 三十六万五千二百九十二円
支出
合計 三十六万五千二百六十二円
(次年度繰越金 十四万二千二百三十三円を含む)

二、議題

1 役員改選について

役員は一部入れかえがあつたが、ほとんど留任となつた。
会長／椎野正之(大正大)、副会長／芳賀馨(福島県立医大)、西村清巳(弘大医療技術短大)、石黒昭博(同志社大)
理事／椎野正之(会長・大正大)、芳賀

馨(副会長・福島県立医大)、西村清巳(副会長・弘大医療短大)、奈良岡保(北東北支部長・弘前大)、斧田好雄(北東北支部長・弘前大)、森一(南東北支部長・郡山女子大)、引地岳雄(南東北支部長・福島県立医大)、松井宣也(関東支部長・新島学園女子短大)、太田敬雄(関東支部長・新島学園女子短大)、島中康男(関西支部長・梅花短大)、飯島武久(山形大)、須田秀幸(郡山女子大)、山本博(弘前大)、吉沢荘七、宇野秀夫(監事・武庫川女子大)、藤原康作(監事・青森大)、小林俊哉(弘前学院大)、市川悠紀子、佐藤幸正(事務局局長・弘前学院大)、佐藤憲和(事務局次長・弘前大)、監事／藤原康作(青森大)、宇野秀夫(武庫川女子大)

2 学術研究団体への登録申請について
この件については来年六月三〇日(月)日(向かつて準備中である)。

3 「比較文化研究会」の学術刊行物扱いについて
この件については、郵政省より、学術刊行物として指定されたので、今後その取扱いにそつて、本部より発送することになる。

4 第12回大会(一九八九年六月二日)について
(1)開催校 福島県立医大
(2)シンポジウムの「テーマ」について
「日本語教育の諸問題」に決定

(1) 編集委員の追加について

森一 (郡山女子大・生物学、南條善治 (東北学院大・人口統計学) 以上二名の追加が認められた。

(2) 第13回大会 (一九九〇年六月) について
関西支部内の大学にて開催予定。来
年一九九〇年六月二日の大会までに、
開催校及びシンポジウムのテーマ
を決定することになる。

第12回大会
準備委員会発足

日本比較文化学会第十二回大会は、一
九九〇年六月二日 (土)、福島県立医科
大学を主会場として開催される予定であ
るが、この度、福島県立医科大学・芳賀
馨教授を委員長とする「第十二回大会準
備委員会」が発足し、大会準備を進めて
いる。やがて、大会準備委員会から、各
支部長宛に「大会案内概要」が郵送され
る予定である。

委員は次の通りである。

委員長 (副会長) 芳賀 馨
(福島県立医大教授)

委員 (南東北支部長) 森 一
(郡山女子大教授)

委員 (南東北副支部長) 引地岳雄
(福島県立医大教授)

委員 (南東北支部幹事) 楠 純一
(福島県立医大教授)

委員 (南東北支部幹事) 渡辺 勇
(ダイナミック・サクセス社長)

委員 (比較文化) 編集委員
南條善治
(東北学院大教授)

委員 (本部事務局長) 佐藤幸正
(弘前学院大教授)

委員 (本部事務局長次長) 佐藤憲和
(弘前大教授)

JACC第12回大会
シンポジウム・
テーマ決定

第12回大会は、一九九〇年六月二日
(土)、福島県立医大で開催の予定である
が、シンポジウムのテーマが、「日本語
教育の諸問題」と決定した。

司会は、福島県立医大外国語講座・引
地岳雄教授。

外国人や日本人に対する日本語教育の
問題をはじめ、関連領域として、日本人
に対する外国語教育の問題まで、比較的
広義にテーマを解釈して、講師を各支部
から推薦して頂きたい。

推薦講師決定次第、なるべく早く、学
会本部 (佐藤幸正教授、又は司会者) 引
地岳雄教授 宛、御連絡頂きたい。

新会員紹介

秋葉 文正 (顧問・化学・弘前学院大)
高橋 端枝 (仙台電波高専)

森山 盛吉 (米文学・明の星短大)

相野 毅 (仏文学・早稲田大)

赤羽 孝夫 (仏文学・早稲田大院)

綾部 素幸 (仏文学・早稲田大院)

大井 英晴 (仏文学・早稲田大院)

尾河 直哉 (仏文学・早稲田大院)

河内 愛 (仏文学・早稲田大院)

下田尾 誠 (英文学・新島女子短大)

田口 啓子 (仏文学・早稲田大院)

長野 督 (仏文学・早稲田大院)

野口 周一 (東洋史・新島女子短大)

原島 秀人 (英語学・高崎経済大)

森下 正之 (経営学・トリニプ・インタ
ーナショナル・ジャパン)

山崎 俊明 (仏文学・青山学院大院)

ノーマン・アングス
(梅花短大)

事務局だより

昨年度もそうでしたが、本年度も学会
紙「比較文化会報」が大幅に遅れて大変
申し訳なく思っております。

早々に原稿をお送り下さった会員諸氏
に心からお詫び申し上げます。

どうか第10号をお届けすることがで
きました。編者に対して、いろいろと
注文もあるかと思えます。どうぞ忌憚
のない御意見をお寄せ下さい。

各研究発表の原稿、切日及びルールに
ついては左記の通りですので、奮って御
応募下さるようお願いいたします。



1 研究発表レジメ

(1) 十二月末日必着で事務局まで。

(2) 横書四〇〇字詰原稿用紙・B5版 (西
洋紙半分大) 二枚。

レジメはそのままコピー、製本致します
ので、できればワープロ等でタイプした
原稿ですと、きれいです。(この場合は
八〇〇字で一枚になります)

2 シンポジウムレジメ

(1) 及び(2)とも研究発表の場合と同じ。

3 「会報」記事は従来通り三月末日
の〆切になります。

4 研究論文集「比較文化研究」につ
いては事務局まで問い合わせ下さい。
(年三回発行)

